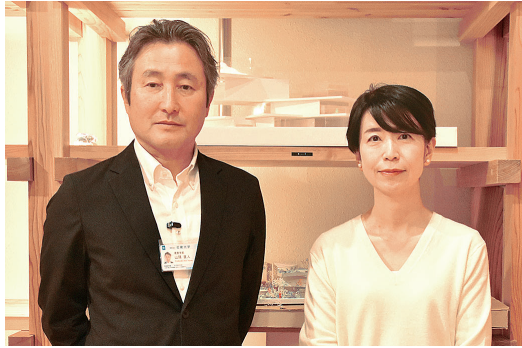


# 近大通信課程に全国から1400人

近畿大学が2025年度に開設した「建築学部通信課程」が、建築教育の新たな選択肢として社会人を中心に広く支持されている。定員600人に対し、1年次入学（高卒）と3年次編入（大学・短大・専門学校卒）の計約1400人が入学し、想定を大きく上回る学生を集めた。同課程を担当する山隈直人教授は「学ぶ目的や背景はさまざまだが、とにかく意欲的な学生が多い」と話す。2月1日に26年度前期の入学者募集を開始。2年目の動向が注目される。

## 建築を学ぶ 新たな選択肢



山隈教授⑤と駒田教授

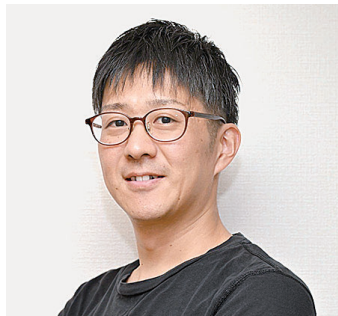
同課程は近大が長年培ってきた建築教育の知見を生かし、働きながら体系的に建築を学べる環境を整え、建築界の人材育成を後押しするのが狙い。必要な単位を取得して卒業すると、1級建築士試験の受験資格を得られるのも特徴の一つだ。オンラインを活用

用した通信教育を基本としつつ、設計演習などは対面とオンラインを組み合わせて実施



スクーリングの様子

### 年齢・職歴の垣根越え設計教育提供



25年度入学の長田さん

するなど、教育の質を担保している。  
入学者の居住地は近畿圏や首都圏をはじめ全国に広がり、年齢も20代から70代まで幅広い。建設会社や設計事務所、営業職など異業種からの転身者、文系出身者も多い。  
同課程を担当する駒田由香教授は「仕事を続けながら建築を学ぶ社会人を中心に、資格取得を目指す層と、実務に生かすため専門性を高めたい層が混在している点も特色だ」と説明する。機械系の職場で働きながら学んでいる長田和真さんは「設計者の立場で建築を考えることの重要性を学び、物事の見方が大きく変わった」と実感している。

\*\*\*

通信教育の特性を生かし、

柔軟にカリキュラムを構成している。テキストを用いた基礎学習やオンデマンド型の講義を基本とし、建築教育の核心となる設計演習は対面とオンラインを組み合わせて実施。スクーリング（対面型授業）は土日を中心とした3日間の集中形式とし、居住地や就業状況に応じて受講方法が選べる。担当教員の多くは設計実務の経験者で、学生一人一人の理解度を意識した指導を心掛けている。  
山隈教授は「設計を学ぶ以上、演習は欠かせない。どうすれば無理なく、実のある形で設計教育を成立させられるかを常に考えている」と語る。長田さんも「スクーリングで『設計者の視点で考える』と言われたことが強く印象に残っている」と振り返る。

\*\*\*

こうした建築教育の在り方は、教員たちの人材育成に対する考え方が色濃く反映されている。駒田教授は「資格を取ることでゴールではない。建築を学ぶことで自分の考えを形にし、社会に示せる力を身に付けてほしい」と強調する。  
山隈教授も「最終的に設計者として社会で自立できる人材を育てたい。そのために必要な基礎や考え方を、通信であっても妥協せずに伝えていく」と力を込める。長田さんは「建築を学び始めてから、日常生活の中でも寸法や建物の造りに目が向くようになった」と感覚の変化を語る。

想定を上回る入学者数を受け、設計課題の指導や講評にかかる教員の負担は小さくない。大学側は教員の増強も視野に、教育の質を維持する方法を模索している。今後は教育体制の充実とともに、学生の学びを継続的に支える仕組みづくりが課題となる。4年次以降を見据えた資格取得支援にも注力し、外部の資格対策講座と連携したオンライン環境を整えることで、1級建築士試験に挑戦する学生を後押しする考えだ。

駒田教授は入学希望者に向け「建築は奥深く、学び続ける価値の高い分野。年齢や経歴に関係なく、一歩を踏み出してほしい」と呼び掛ける。山隈教授も「建築を学びたいという思いがあれば、通信課程でも十分挑戦できる。社会で生きる力につながる学びを、ここに積み重ねてほしい」とエールを送る。

